

デジタル関連用語集

デジタル技術やDXに関する用語の中には、一般企業や非IT部門ではなじみが薄いものもあります。この用語集では、スキル整理表や利用ガイドで使用している主要な用語の意味を、できるだけ平易な言葉でまとめています。社内での学習・研修やスキル整理表の活用時にご参照ください。

1. BI (ビジネス・インテリジェンス) 読み方：ピーアイ 経営や業務の意思決定に使うデータ（売上、在庫、原価など）を自動で集計・見える化する仕組み。 グラフやダッシュボードを通じて、データに基づいた判断を行うことができる。 〈活用例〉売上実績を自動集計し、月次会議で経営指標を共有する。
2. ノーコード・ローコードツール プログラミングの知識がなくても、マウス操作や設定だけで業務アプリや自動化処理を作れるツール。 複数の人が同時に使えてデータが自動で更新され、入力内容をチェックする仕組み（ワークフローや権限管理など）を簡単に設定できる。 〈活用例〉点検記録や申請フォームを自分でアプリ化し、入力や承認を自動化することで、Excelのファイル共有や転記作業をなくす。
3. クラウド (Cloud Services) インターネット上のサーバーにデータを保存し、どこからでもアクセスできる仕組み。 自社でサーバーを管理する必要がなく、コスト削減や在宅勤務にも対応できる。 〈活用例〉Microsoft 365やGoogle Driveでファイルを共有し、社外からも利用する。
4. IoT (Internet of Things : モノのインターネット) 読み方：アイオーティー センサーや機械をインターネットにつなぎ、稼働状況や温度などのデータを自動で収集する仕組み。 設備や作業の「見える化」により、異常の早期発見や保守の効率化、人の勘や経験に頼らない生産・管理ができるようになる。 〈活用例〉工場の設備にセンサーを取り付け、稼働データを自動記録し、異常があればアラートを出す。
5. PoC (Proof of Concept : 概念実証) 読み方：ピーオーシー 新しい技術やツールを導入する前に、小規模で試して効果を確認する取り組み。 実際の業務に合うかどうかを早い段階で確かめられるため、失敗のリスクを抑えつつ、導入コストを最小限にできる。 〈活用例〉AIやRPAを特定業務で試験導入し、作業効率やミス削減の効果を検証する。
6. デジタルツイン 現実の設備や工場をコンピュータ上で再現し、シミュレーションや改善検討を行う技術。 実際の現場を止めずに、作業工程やレイアウト、稼働条件などを事前に検証できる。 PoCとの違いは、PoCが「新しい技術や仕組みの有効性を試す」ことを目的とするのに対し、デジタルツインは「既存の設備や業務を仮想空間で再現して継続的に最適化する」ことを目的としている。 〈活用例〉製造ラインをデジタル上で再現し、生産効率や安全性をシミュレーションする。
7. API連携 読み方：イービーアイれんげい 異なるシステムやアプリがデータをやり取りできるようにする仕組み。 従来のようにCSVやExcelファイルを手動で出力・取り込みする必要がなくなり、入力ミスや更新漏れを防げる。 リアルタイムでデータが同期されるため、情報の最新性と業務スピードが大幅に向上する。 〈活用例〉会計ソフトと販売管理システムをつなぎ、売上データを自動反映させることで入力作業を削減する。
8. UX (ユーザーエクスペリエンス) 読み方：ユーエックス サービスやシステムを使う際の「使いやすさ」「満足度」「体験価値」を指す言葉。 UI (ユーアイ/ユーザーインターフェイス) が画面やボタンなどの「見た目・操作部分」であるのに対し、UXはその操作を通じて得られる全体の体験や印象を意味する。UXを意識して設計することで、顧客が迷わず使えるサービスや、従業員がストレスなく業務を進められるシステムを実現できる。 〈活用例〉顧客がストレスなく使える予約システムやWebフォームを設計し、離脱や入力ミスを減らす。
9. RPA (ロボティック・プロセス・オートメーション) 読み方：アルピーイー パソコン上の定型作業（データ入力・転記など）をソフトウェアが自動で行う仕組み。 繰り返し作業を自動化することで、作業時間を大幅に削減でき、ヒューマンエラーを防止できる。 一方で、効率化の対象が「本来なくすべき手作業」である場合、RPAを導入しても不要な業務プロセスが温存されるおそれがある。そのため、導入前に業務内容を整理・見直すことが重要。 〈活用例〉請求書データの転記や定型メール送信を自動化し、事務作業を削減する。